

豊かな学び手が育つ授業の創造 ～カリキュラムマネジメントの実現を目指して～

熊本市立出水南小学校

要約

将来の変化を予測することが困難な時代を前に、様々な事象の中から自ら課題に気づき、他者と協働して課題の解決を図りながら自らの生涯を生き抜く力を培っていくことが、必要不可欠なものとして求められている。

そこで本校では、「パフォーマンス課題」と「ルーブリック評価」に重点的に取り組んできた。カリキュラムマネジメントの推進により、目的や課題に向かって自らよりよく学ぼうとする児童の姿が増え、「豊かな学び手」として育つことが明らかになった。

〈キーワード〉

パフォーマンス課題 ルーブリック評価 カリキュラムマネジメント 振り返り

1 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

昨今、グローバル化や情報化が進展する社会の中では、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことがますます難しくなっている。児童が将来就くことになる職業の在り方についても、技術革新等の影響により大きく変化することになると予測されている。

現行の平成 29 年度版学習指導要領では、これからの未来、予測困難な社会を迎えるからこそ、「確かな学力、豊かな心、健やかな体を重視する『生きる力』をはぐくむことがますます重要になっている。」と示されており、「資質・能力」をベースに内容が3つの柱で整理されている。また、文部科学省は新たな学習評価の在り方として、パフォーマンス評価を位置付けた学習モデルについても示している。つまり、主体的に問題解決を図る学ぶ過程においての形成的評価が重要であり、教科の枠を越えた汎用的な力の育成が求められているのである。

熊本市でも「令和版 学びわくわく熊本市の授業づくり」において、教師が「教える」授業から児童が「学びとる」授業への改革を目指している。本校でも、教育活動全体を見通したカリキュラムマネジメントを行い、児童自身が本気で取り組みたくなる課題設定や自ら振り返り学びに生かすことのできる評価を通して、「豊かな学び手」に育つ授業を創造することが重要だと考えた。

(2) 学校教育目標から

本校の教育目標・目指す児童像は次のとおりである。

〈 教育目標 〉 主体的に考え、仲間と協働し行動できる児童の育成
～「チーム出水南」の挑戦～
〈目指す児童像〉 ○やさしく・・・進んで人の役に立ち、さわやかな挨拶をする児童
○かしこく・・・自ら学び、主体的に社会の課題を解決できる児童
○たくましく・・・命を大切にし、意欲的に運動に親しむ児童

児童が豊かな学び手として、生涯にわたって社会参画していく力を身に付けていくために、学校にできる最も大きな役割は、日々の授業実践を通じた支援・指導である。教科の特性を生かした支援・指導に加え、教科の枠を越えた実践を通して、主体的に考え、仲間と協働し行動できる児童の育成を図ることが重要である。そのために、児童の実態を十分に把握、分析し、職員が連携、協力

しながら本研究を進めていくことが、児童の「生きる力」の育成につながるのだと考えた。

(3) 研究経過から

一昨年度は、「豊かな学び手が育つ授業の創造」という研究主題のもと、体育科・国語科・外国語科に実践の枠を広げ、パフォーマンス課題の設定やルーブリックを用いた評価を軸に、他教科等にも汎用的に学びを活用できるような研究に取り組んできた。実践を重ねる中で、課題に対する評価を自ら行う姿が増えるなど、教科内での深まりは見られたが、職員間での連携が難しかったという課題も挙がった。そして昨年度は、外国語科及び外国語活動を中心に据え、カリキュラムマネジメントの視点のもと、対話を通して課題解決できるような課題設定と評価に取り組んできた。自らの目的や課題に向かって主体的に学び、振り返りをもとに改善を繰り返しながらよりよくコミュニケーションを図る姿が高まってきた。

そこで本年度は、昨年度の流れを軸として、児童の意欲をさらに喚起し学びが深まるようなパフォーマンス課題の精選や、自らの学びをよりよく調整していくためのルーブリック評価の充実に取り組むこととした。そうすることで、主体的・協働的に課題の解決に向かう姿が増え、「豊かな学び手」が育っていくのだと考えた。

(4) 本校の児童の実態から

本校児童は、全体的には素直で活動的であり、主体的実践力や自主性も伸びてきている。始業前の奉仕活動にもほとんどの児童が参加するなど、言われたことは最後まで取り組むことに加え、創意工夫してよりよく活動しようとする姿も増えてきている。一方で、次のような課題が挙げられる。

- ・自ら課題を見つけて学びを創り出す児童とそこまで達しておらず、指示待ちになってしまう児童がいるため、全ての児童が主体的に問題解決を図ることのできる学びをさらに展開していくことが必要である。
- ・うまくいかないときにすぐに人に頼ったり、独りよがりの考えで活動に臨んだりする児童もいるため、自ら考え他者と協働して行動する活動の良さを味わえるようにする必要がある。
- ・友達との関わりを苦手としている児童が一定数いるため、関わることのよさを感じられるような単元計画や学習過程の工夫、さらに、支援・指導による活動の充実が必要である。

以上のような実態を踏まえ、カリキュラムマネジメントを中軸に据えて児童が自ら学びとる授業を展開し、主体的・対話的な学びを繰り返すことができれば、学びが深まり、「豊かな学び手」が育つのではないかと考えた。

2 研究の仮説

児童の主体性を引き出す学習課題を設定し、学びを実感できるような評価を位置付けながら、カリキュラムマネジメントの実現を目指した授業を展開すれば、主体的・対話的で深い学びが生まれ、児童は「豊かな学び手」に育つであろう。

(1) 「豊かな学び手」とは

他者と協働して課題に取り組んだり、自らを動機づけたりしながら学び続けるための「資質・能力」を主体的に高めている姿と捉える。

(2) 「カリキュラムマネジメントの実現」とは

教育内容の質の向上に向け、教科等横断的な視点で教育内容を配列したり、実施・評価・改善を繰り返すサイクルを確立したりするなど、組織としての授業改善の営み全体であると捉える。

3 研究の視点

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

児童にとって、自分の考えをもとに友達と力を合わせて解決することができる課題であれば、学習が「自分ごと」となり、当事者意識をもって取り組むことができる。

本研究では、単元を通して学習し、課題の解決に向けて他者と協働しながら本気で取り組むことのできる課題（以下、**パフォーマンス課題**）を設定することで、課題解決への見通しをもって主体的に学習に取り組むことができると考える。パフォーマンス課題は、教科横断的な視点から全単元を俯瞰し、関連付けながら設定することで、さらに必然性のある課題となり、問いが生まれやすくなる。児童の学びのプロセスを意識して単元を構成することで、その過程においてICT端末を活用して情報を整理・分析して表現したり、友達と協働して取り組んだりする必要性が高まるため、児童の主体性がさらに引き出され、学びの連続によって深い学びの実現にもつながるものとする。

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

漠然と活動に取り組むだけでは、児童の学びは深まらない。学習後や学習中に自らを振り返ることは、客観的に自身を捉え直し、よりよい学びにつなげるために必要な力を生む。伸びを確認する場があることで、児童は身に付いた力を自覚でき、今後の学びへの意欲も高まる。

本研究では、どのような学びを目指すのかを授業者と児童で共有し、その具体的な姿を表す評価の基準（以下、**ルーブリック**）を作成することにより、児童は自身の学びを振り返り、再構築しながら学習に臨んだり、友達の頑張りを認めながら学び合ったりすることもできるようになる。

そこで、パフォーマンス課題の達成に向けた基準を「**成果物のルーブリック**」として単元ごとに作成し、主体的・対話的で深い学びの姿が学びの過程で見られるように毎時間を形成的に振り返る基準を「**学び方のルーブリック**」として設定する（資料1）。児童が学びを実感したり、次の学びへの意欲を継続したりすることができるとともに、授業改善につなげることができるように思うと考える。

低学年				中学年				高学年						
観点	A	B1	B2	C	観点	A	B1	B2	C	観点	A	B1	B2	C
すすんで	めあてがわかり、やる気をもって取り組むことができた。また、友だちにも教えることができた。	めあてがわかり、やる気をもって取り組むことができた。	めあてがわかり、ともだちや先生に聞いてとりくむことができた。	今日することにりとくむことができなかった。	自ら	今日することが分かり、やる気をもって進んでがんばり、今日のめあてがたっせいできた。必要ときに友達へアドバイスをすることができた。	今日することが分かり、やる気をもって進んでがんばり、今日のめあてがたっせいできた。	先生や友達と考えを交流し、今日することが分かり、今日のめあてがたっせいできた。	今日することが分からず、今日のめあてがたっせいでできなかった。	主体的な学び	今日の課題がわかり、進んで取り組み、今日の課題が解決できた。	今日の課題が分かり、進んで取り組み、今日の課題が解決できた。	先生や友達にサポートしてもらって今日の課題が解決できた。	今日の課題がわからず、今日の課題を解決できなかった。
みんな	自分の考えと友だちの考えをくらべて新たな意見をもちつことができた。	自分の考えと友だちの考えをくらべて新たな意見をもちつことができた。	先生やともだちに相談して自分の考えをもちつことができた。	自分の考えをもちつことができなかった。	みんな	自分の考えをもち、進んで友達と考えを伝え合うことができた。友達の考えのよさやちがいを見つけ、伝えることができた。	自分の考えをもち、進んで友達と考えを伝え合うことができた。	先生や友達と考えを交流し、自分の考えをもち、伝え合うことができた。	自分の考えをもちつことができず、友達と考えを伝え合うことができなかった。	対話的な学び	自分の考えをもち、進んで友達と意見交換をする中で友達の意見の良さを見つたり、自分の考えを高めたりすることができた。	自分の考えをもち、進んで友達と意見交換をすることができた。	先生や友達にサポートしてもらって友達と意見交換をすることができた。	自分の考えをもちつことができず、友達との意見交換をすることができなかった。
つくる	新しい発見や考えをもち、自分の考えを深めることができた。	新しい発見や考えをもちつことができた。	先生や友達と考えを交流し、新しい発見や考えをもちつことができた。	新しい発見や考えがなかった。	生かす	新しい気づきや問い、考えなどをもち、自分の考えをさらに深めることができた。	新しい気づきや問い、考えなどをもちつことができた。	先生や友達と考えを交流し、新しい気づきや問い、考えなどをもちつことができた。	新しい気づきや問い、考えなどがなかった。	深い学び	課題を解決していく中で、新しい気づきや考え、問いなどをもち、自分の考えをさらに深めることができた。	課題を解決していく中で、新しい気づきや考え、問いなどをもちつことができた。	先生や友達にサポートしてもらって、新しい気づきや考え、問いなどをもちつことができた。	課題に対する新しい気づきや考え、問いがなかった。

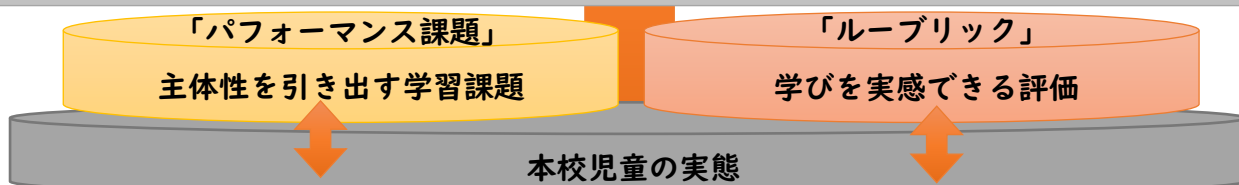
資料1 令和5年度版 学び方のルーブリック（出水南小学校版）

4 研究の構想

【本校教育目標】 主体的に考え、仲間と協働し行動できる児童の育成～「チーム出水南」の挑戦～

豊かな学び手が育つ授業の創造
～カリキュラム・マネジメントの実現を目指して～

児童の主体性を引き出す学習課題を設定し、学びを実感できるような評価を位置付けながら、カリキュラムマネジメントの実現を目指した授業を展開すれば、主体的・対話的で深い学びが生まれ、児童は「豊かな学び手」に育つであろう。



5 研究の実際

(1) 6年生の実践

外国語科 Unit6 「This is my town.」

ア 授業の概要

本単元では、「熊本に新しく来られたALTの先生方に熊本の魅力を伝えよう」というパフォーマンス課題を児童とともに設定した。設定に際して、1学期の総合的な学習の時間「出水南の誇りを見つけよう」での学びを想起し、地域のよさを再発見した。また、ALTの先生方からのビデオメッセージを視聴することで、「初めて熊本に来られるALTの先生方に地域の良さを知ってもらいたい」という児童の思いも生まれてきた。単元中盤には、Zoomでのオンライン通話を通して先生方に思いを伝える機会をつくり、先生方の興味・関心に応え、より相手意識をもって主体的に学習に取り組むことができるようにした。さらに、成果物のルーブリックを児童と考えることで、目指す姿の共通理解を図った。相手や目的を明確にし、よりよい発表の姿を具体的にしていくことで、児童の主体的・対話的で、深い学びが促されるような学習が出来るように取り組んだ。

イ 視点についての取組

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

単元導入では、熊本市に新たに配属された8人のALTの先生方のビデオメッセージを視聴した(資料2)。それを見た児童からは、「ALTの先生方を招いて熊本の魅力を伝えたい」という声が表れ始めた。ALTの先生方の関心ある分野が異なっていたため、児童自身がより伝えたい相手を選択してグループ分けに取り組み、パフォーマンス課題を設定して学習を進めることにした(資料3)。このように、単元のゴールを児童とともに設定することで、単元を通して児童の主体的に学ぶ意欲が高まる。また、「ALTの先生に」という相手意識と「熊本のことを紹介してもらって熊本を好きになってもらいたい」という目的意識を持った課題を設定することで、児童にとって必要感のある学びとなった。そのような課題設定の工夫に取り組んできた。



資料2 ALTからのビデオ視聴



資料3 ALTを選択する児童

単元前半では、熊本を紹介するために、あるもの(have)やできること(can)、感想(It's)の言い方を学習した。しかし、それだけでは「ALTの先生に熊本の魅力を伝える」という課題の達成には十分ではない。それに児童が自ら気付くことができるよう、第4時の活動の中で、ALTの先生にZoomによるオンライン通話で実際に伝える活動を位置付けた(資料4)。活動後の児童からは、「あまり伝わらなかった。」「反応があまりもらえなかったから、本当に行きたいと思ってもらえるように頑張りたい。」などの感想が表れてきた。そこで、単元後半では、Unit5「My Summer Vacation.」の学びと関連付けながら、夏休みに自分が経験したことなどをもとに思いを伝えていくことで、さらに表現を豊かにしていくようにした。単元ゴールに向かう中で、単元中盤に位置付けたALTとの交流は児童自身の相手意識や目的意識を確認する上で非常に効果的であり、自身を振り返って発表内容を修正していくことにもつながった。



資料4 ZoomでALTに伝える児童

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

漠然と活動に取り組むだけでは、児童の学びは深まらない。そこで、「どんな工夫をすれば相手に自分の思いが伝わり、興味を持って聞いてくれるか」という基準を児童とともに話し合い、成果

物のルーブリックを作成した（資料5）。児童の声を取り入れて、教師と児童が具体的な姿となる基準とともに作り出していくことで、児童自身も目指す姿を想起することができるようになった。それにより、本単元で身に付けたい言語材料の定着を図るとともに、自分の経験を加えて伝えたり、相手の反応に合わせて発表を工夫したりしていく姿につながった。また、ルーブリックには活動の中で生まれた新たなポイントを具体的に追加していくなど、修正を加えながら目指す姿として常に位置付け続けるようにした。AやB1の姿を目指して、自分の思いをよりよく伝えるための方法を考えながら取り組む姿が多く見られるようになったり、自らの学びを客観的に振り返りながら、単元を通して学びを発展させようとしたりする姿につながっていった。

ルーブリックの	【パフォーマンス課題】ALTに熊本の魅力を紹介しよう			
	A	B1	B2	C
成果物の	(B1に加えて)相手の反応を見ながら、内容や会話を工夫している。	(B2に加えて)熊本にあるものとしてできること、その様子を分かりやすく伝えていく。	熊本にあるものとしてできること、その様子を伝える。	友だちや先生のサポートを受けて、あるものやできること、その様子を伝えている。
資料5				

資料5 児童とともに作成した成果物のルーブリック

また、互いの発表を評価し合う相互評価の場面でも、ルーブリックは有効である。「相手に行きたいと思ってもらえるような発表にしたい」など、課題解決に向けた児童の思いに沿う形でこの成果物のルーブリックを用いることで、友達に対して「よかった」などの漠然とした返しではなく、より具体的な助言をし、互いに高め合おうとする姿につながっていった（資料6）。



資料6 相互評価の様子

さらに、発表内容を振り返り、よりよいものに修正していく過程では、思考ツールを用いた。この思考ツールは児童の思いに応じて単元前半から活用していくため、単元を通して以下のような変化が見られた（資料7）。活動を重ねる中で得た気づきを付け加えたり順番や内容を修正したりすることで、言語材料が増え、伝えたい内容がより明確になった。これにより、担任も児童がどこまで到達できているかを把握しやすくなり、個別の支援にも広げることができた。



資料7 単元を通した思考ツールの変化



資料8 国際交流会を楽しむ児童

本単元の最後には、8人のALTの先生方を招き、国際交流会を行った。児童はALTへの発表が伝わっているか、興味を持って聞いてくれているかを確認しながら、学びを生かそうとする姿が見られた。児童の振り返りにも、ALTの反応に合わせて発表を行い、コミュニケーションを楽しんだ様子が書かれていた（資料8）。直接ALTから反応をもらうことで、今まで学習したことが価値づけられて児童の自信となり、さらに学びを深めていく姿が多く見られた。

ウ 成果と課題

児童の学びが教室だけでなく、「本物の」コミュニケーションの場があることで、児童はより主体的に取り組むことができた。また、ALTからのビデオメッセージ、Zoomを用いた交流、そして最後の直接交流の場を位置付けたことで、相手意識・目的意識をより高めることができた。さらに、ルーブリックを使って目指す姿を児童と共有することで単元を通して自らを高めようとする姿が多く見られるようになった。一方で、内容の深まりには個人差が見えた部分もあったため、今後はさらに個別最適な学びの充実にも取り組んでいきたい。

(2) 5年生の実践

外国語科 Unit 6 「I want to go to Italy.」

ア 授業の概要

本単元では、「行きたい国について、隣のクラスの友達と伝え合おう」というパフォーマンス課題を児童とともに設定した。単元の最初に、社会科や外国語活動での世界の国に関する学習を想起させ、国に関するクイズなどをして、様々な国に対しての興味関心がより高まるようにした。設定の際に、人によって行ってみたい国と理由が異なることから、「行きたい国を知ると相手のことも知ることができる」という児童の思いも生まれた。そして、集団宿泊教室で学年の仲を深めた経験とも関連付けることで、「お互いのことを知ると仲も深まるので、友達と伝え合いたい」という思いが生まれたため、本単元では英語でのやりとりを通じて互いの思いを伝え合う姿を目指し、児童が相手意識や目的意識をもって主体的に学習に取り組むことができるようにした。毎時間の授業の中では、行きたい国について伝え合う中で生まれた児童の困りからその都度課題を共有し、成果物のルーブリックや中間指導を位置付けることで、目指すやり取りの具体的な姿を明確にしながらか通理解を図り、児童の主体的・対話的な学びができるように取り組んだ。

イ 視点についての取組

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

単元導入では、今までの社会科や第4学年までの外国語活動の学習を想起させたり、国に関するクイズを出したりして外国の特徴を掘り下げていった。その中で、児童に「どこの国に行ってみようか」を尋ねると児童の行きたいと思う国や理由が異なっていた。その理由を深堀りすることでその人の趣味嗜好や好みがわかるようになり、児童の中で「行きたい国を知ると、その人のことをよく知ることができる」という認識が生まれた。そこから、「行きたい国についてやり取りする中でお互いのことを知って、もっと仲良くなりたい」という声が出始めた。そして、集団宿泊教室での経験も踏まえて、「自分のクラスだけでなく隣のクラスの人とも」という相手意識も芽生え、パフォーマンス課題「行きたい国について、隣のクラスの友達と伝え合おう」を設定した。このように、ゴールを児童とともに設定することで、単元を通して児童の主体的に学ぶ意欲を高め、「隣のクラスの友達と」という相手意識と「お互いに行きたい国を伝え合って、仲良くなりたい」という目的意識を持った課題となり、児童にとって必要感のある学びとなるように工夫した。

単元の前半では、行きたい国を伝え合うために、各国の言い方や行きたい国の尋ね方 (Where do you want to go?)、行きたい国の伝え方 (I want to go to) を学習した。それらの表現を用いてやりとりする中で、児童から「これだけではお互いのことをよく知ることはできない。」という声が出てきた。そこで、どうすれば良いかを児童と単元導入でのクイズを想起させながら考えた。すると、「なんでその国かがわからないと伝わらない。」「理由が必要だ。」などの感想があった。

そこで、単元の後半では、児童の声を基に、したいこと (want to) の表現を用いて行きたい国の理由について表現していくようにした。理由を伝え合う中で、感想 (It's) や好きなこと (like)、質問 (Do you like? や What do you like?) など既習表現を用いている児童がおり、それを全体で共有することで具体的に目指す姿を意識することができるようにした(資料9)。単元ゴールに向かう中で既習事項を用いることや



資料9 モデリングの様子

やりとりの中での質問の良さについて考えることは目的意識を持つ中で非常に効果的であり、自分自身のやり取りを修正していくことにもつながった。

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

パフォーマンス課題である「行きたい国について、隣のクラスの友達と伝え合おう」に向けて学習を進めていく中で、成果物のルーブリックを作成した(資料10)。ルーブリックを活用し、「お互いを知って仲良くなるために、行きたい国についてどんなことを伝え合えばいいか」という基準を児童の声や姿から作り出すことができた。そのことで、児童の目指す姿を共有することができ深い学びに繋がるようになった。また、ルーブリックをB2からAまで提示することで見通しを持った学習を行うことができ、本単元で身につけたい言語活動が明確になり、児童の行きたい国の理由を付け加えたり質問したりする姿に繋がった。そして、ルーブリックに書く内容は児童の言語活動の中からモデリングをしていき、ルーブリックとモデリングを関連付けることで目指す姿をイメージしやすくなった。児童は自分の学習に合わせてB1やAの姿を、ルーブリックをもとに目指すことで自身の学習を客観的に振り返りながら深めることにつながった。

本単元ではやり取りという形で話し手と聞き手が生まれるが、ルーブリックを活用することで自分たちのやり取りを客観的に捉えることができ、より話し手が内容を工夫したり、相互に質問をして会話が広がったりする姿に繋がっていった。

さらに、今回のやり取りを行う上で行きたい国についてまとめる際に思考ツールを用いた(資料11)。思考ツールには行きたい国とその理由を加えていった。活動を重ねる中での気づきや修正を加えることで、児童の伝え合う内容が明確となった。活動ごとに加えるテキストの色を変化させることで児童1人1人の思考の変化を可視化することができ、児童もテキストから自分の学びを実感することができた。また、教師が行う個別の支援がしやすくなったことにもつながった。

本単元の最後には、隣のクラスとの交流会を行った。児童からは本単元で学習したことを生かそうと理由を付け加えていたり、質問を積極的にしたりしてやり取りをより楽しもうとする姿がみられた。児童の振り返りにも、「相手のことをよく知ることができた。」「質問することで相手の好きなことなどがわかった。」などやり取りをする中でお互いのことを知ることができたことなどが書かれていた(資料12)。隣のクラスとの交流会は初めてで児童は新鮮な気持ちで取り組むことができたうえに、学習したことを活かしたことが児童の自信となった。

ウ 成果と課題

言語活動とパフォーマンス課題を関連付けることで、児童の活動が隣のクラスに広がった。相手意識や目的意識が広がったことが児童の主体的に学習する姿にもつながった。また、隣のクラスとの交流会の前に国際交流会でALTと行きたい国について伝え合ったことが自信となり、次時へとつながる学習意欲にもなった。さらに、中間指導とルーブリックを活用することで目指すやり取りの具体的な姿が明確となった。加えて、相手の話を受けてその場で尋ねたり答えたりしてやり取りを工夫する姿がみられた。一方で、その場で質問をするには聞き手の役割が重要である。今回活用したルーブリックは話し手の視点には合ったものであったが聞き手も育つようなものであったかは検討の余地があるように感じた。今後はさらに個別最適な学びの充実にも取り組んでいきたい。

成果物のルーブリック	【パフォーマンス課題】行きたい国について、友達と伝え合おう。			
	A	B1	B2	C
(B1に加えて) 会話を続けるために、相手に応じてさらに自分の考えや質問を付け加えて伝え合うことができる。 (評価) <i>Do you like...? What do you like? Can you...!</i>	(B2に加えて) 行きたい理由をより詳しく伝え合うことができる。 ・I want to ~(理由) など ・It's delicious(様子) ・I like~	Where do you want to go? やI want to go to...を使って行きたい国を伝え合うことができる。	先生や友達をサポートを受けて、行きたい国とその理由を伝え合うことができる。	

資料10 児童とともに作成したルーブリック

①にはフランス国旗の写真を使用
②には教科書掲載のカードを使用

資料11 単元を通した思考ツールの変化

今日は1組の人と行きたい国について話して、最初は緊張したけど話していくうちに楽しくなっている人々と話せたので良かったです。それに他の人のこともたくさん知れたので嬉しかったです。次は3組とか4組の人とも話したいです。それにペアの子とも協力しながらできたので良かったです。 nice.	先生より <input type="checkbox"/> 理解 good! <input type="checkbox"/> 気づき good! <input type="checkbox"/> Nice 対話! <input type="checkbox"/> Nice 問い! <input checked="" type="checkbox"/> 工夫 good! <input checked="" type="checkbox"/> 友達との学び <input checked="" type="checkbox"/> ねばり強い! <input checked="" type="checkbox"/> Nice 課題!
今日は、「what ~do you like」と聞くことができました。もっと相手の好きのものがしれて嬉しかったです。あと味なども言えたりすることが分かりました。 <i>相手のことをよく知ることができました!</i>	<input type="checkbox"/> 理解 good! <input type="checkbox"/> 気づき good! <input type="checkbox"/> Nice 対話! <input type="checkbox"/> Nice 問い! <input checked="" type="checkbox"/> 工夫 good! <input checked="" type="checkbox"/> 友達との学び <input checked="" type="checkbox"/> ねばり強い! <input checked="" type="checkbox"/> Nice 課題!

資料12 単元における児童の学びの振り返り

(3) 4年生の実践

外国語活動 Unit 6 「Alphabet」

ア 授業の概要

本単元では「アルファベットを集めて自分のネームプレートを作り合おう」というパフォーマンス課題を児童とともに設定した。本校では、学期に1回、各学年で複数のALTの先生をお招きしての国際交流会を行っている。設定に関して、学んできたアルファベットを単元終了時に行われるたくさんのALTとの国際交流会に生かしたいという意欲につなげた。友だちや教師、ALTとのアルファベットカードの交換を通して“Do you have～?”や“How many～?”などの表現を使いながら、児童の主体的・対話的で、深い学びが促されるような学習ができるように取り組んだ。

イ 視点についての取組

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

単元前半では、導入でアルファベットの小文字の発音を確かめたり、ゲームやクイズなどでアルファベットに親しんだり、楽しみながらアルファベットへの理解が定着するような活動を積み重ねた(資料13)。単元中盤では「国際交流会でALTの先生方と仲良くなるために学習したことを何かに生かしたい」という児童の振り返りを取り上げ、自己紹介のためのネームプレートを作り合う活動につなげた。単元後半では「ネームプレートを作るために、友達と会話をしながらアルファベットを集める」という必要感のある学習活動を設定し、児童が目的意識をもって「アルファベットを集めたい」と意欲的に取り組めるようにした。必要感のある学習活動を設定したことで、進んで友達に英語で声をかけ、楽しんでアルファベットを集めようとしていた。

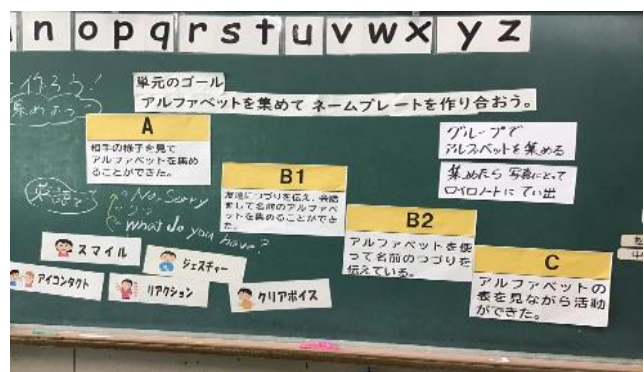


資料13 課題設定の様子

さらに、児童の対話を活性化させるために、中間評価で児童の困り感を取り上げたり工夫して話していた児童を紹介したりした。活動前半では本単元で学習した“Do you have～?”と相手に尋ねる表現を中心に友達とやりとりをしていたが“and”を使って2枚集める“What do you have?”と尋ねて相手の持っているカードを確かめるなど、これまでに身につけてきた語彙を柔軟に使いながら会話を工夫して集めようとする姿が見られた。

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

単に課題を設定し、アルファベットカードを集めるだけでは、よりよいやり取りを行おうとする意識は芽生えない。そこで、「どんな工夫をすれば効率よくアルファベットカードを集めることができるだろう」「どのような伝え方をすると、相手と気持ちよく会話することができるだろう」などの、会話をよりよいものにするための工夫を児童とともに考え、成果物のループリックを作成した。また、活動の中で児童が新たに発見した工夫をループリックに書き加えていくことで、学級全体に学びが広がり、互いに高め合おうとする姿も見られた(資料14)。教師と児童が共に目指す姿の基準を考えていくことで、児童は課題に対して主体的



資料14 段階的に提示したループリック

に取り組むことができた。また、ルーブリックを用いて振り返りを行うことで、児童は自身の学びの深まりを客観的にとらえることができた。

単元の最後には、8人のALTを招き、国際交流会を行い、自分のネームプレートを見せながら自己紹介をした。自分の名前のアルファベットに親しみを持つだけでなく、友達やALTの名前のアルファベットにも関心を寄せて、お互いの自己紹介を意欲的に聞き、さらに学びを深める児童の姿が見られた（資料15）。



資料15 アルファベットカード交換の様子

ウ 成果と課題

必要感のある学習活動を単元全体に位置付け、毎時間継続して取り組んできたことで、児童の話す意欲が高まり、十分な発話量を確保することができた。ルーブリックを使って、目指す姿を児童と共有したことで、漠然と授業に臨むのではなく、目標を持って学びに向かう児童の姿が大きく増えたことを感じる。また、振り返りにおいて、ルーブリックを用いて自らを客観的に振り返る習慣がつくなど、児童は、課題意識を持って活動し、外国語活動の学び方を身に付けたことがわかる。

一方で、本単元で身に付けるべき資質・能力や、押さえておきたい言語表現を児童が十分使っていたのを見取ることが難しかった。さらに他教科においても、自分の伸びを確認したり次時への意欲を持ったりできるよう、振り返りを重視しながら継続して取り組んでいきたい。

(4) 3年生の実践

外国語活動 Unit 5 「What do you like?」

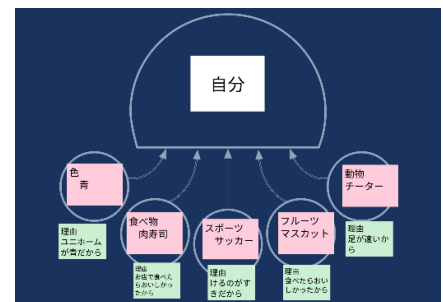
ア 授業の概要

本単元では、「ALTの先生と好きなものを伝え合ってもっと仲良くなろう」というパフォーマンス課題を児童とともに設定した。ALTの先生と仲良くなるために、会話を楽しくするにはどうしたらいいかを考え、成果物のルーブリックを作成して、目指す姿の共通理解を図った。これまで、「スマイル」「アイコンタクト」「クリアボイス」など、よりよく会話をするための要素を少しずつ身に付けてきたため、本単元では、相手の発言に対して「リアクション」をすることでさらに楽しく会話ができるように取り組んだ。リアクションの様々な方法（相手の言ったことを繰り返す、頷くなど）を児童の姿から確認しながら、対話を通して学びが深められるようにした。

イ 視点についての取組

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

1学期にALTの先生との交流会を行った。ALTの先生の国のことや自己紹介を聞いて英語や外国の文化に興味をもち、英語で会話をすることの楽しさに気づくことができた。しかし、限られた語彙の中でなかなか質問できなかつた。そこで、2学期にもALTの先生との交流会を計画し、もっと会話ができるように、「ALTの先生と好きなものを伝え合ってもっと仲良くなろう」というパフォーマンス課題を設定して学習に取り組んだ。自信をもって交流に臨めるように既習の単語を使って友達と好きなものを尋ね合い、進んで練習に取り組んでALTの先生に質問したいという意欲を



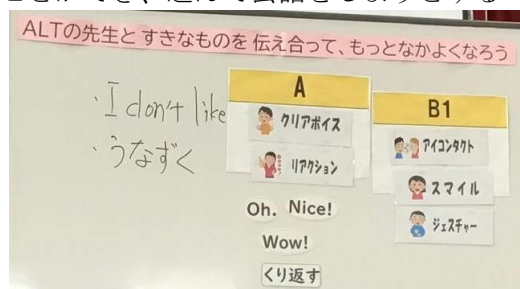
資料16 思考ツール（くらげチャート）

高めていた。また、学んだ言葉や表現を使って楽しく会話ができるように、思考ツールを活用し、伝えたいことについて簡単に理由も添えながらまとめるようにした（資料16）。思考ツールで整理することで、何を伝えるのかを明確にイメージすることができ、進んで会話をしようとする姿が多く見られるようになった。

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

ALTの先生と楽しく会話をして仲良くなれるように、児童と話し合いながら成果物のルーブリックを作成した。まず、これまで取り組んできた伝え方の工夫をB1という評価に位置づけた。さらに会話を楽しくするために、リアクションをすることをA評価に設定した（資料17）。また、ルーブリックで目標を明確にした

ンをする姿が見られた（資料18）。相手の発言を繰り返して同意の意思を示したり、相手が好きなものを答えた後に自分の好きなものを伝えたりするなど、児童の会話から出た様々なリアクションを全体で共有することで目指す姿を再確認し、どのようにリアクションをするのかを考えながら取り組むことで、8割以上の児童がルーブリックのAを達成できたと実感していた。



資料17 児童と作成した成果物のルーブリック



資料18 会話を楽しむ児童の姿

ウ 成果と課題

パフォーマンス課題を設定して単元のゴールを意識して取り組んだことで、児童も目的意識をもって学習に取り組むことができた。ルーブリックを活用することで何を高めるべきかを明確にでき、相手の発言に反応することでより会話を楽しくできることに気づくことができた。また、リアクションをA評価に設定することで、会話の中で相手の発言をよく聞き、反応しようとする姿が多く見られるようになり、自分の姿を振り返ることで目標の達成へとつなげることができた。そのことが、児童の表現力向上にも大変有効であったと考えられる。

本単元では、児童の対話を中心に繰り返し発音しながら好きなことを尋ね合ってきたが、児童のリアクションを共有する場面では、ALTの先生にも児童のリアクションを実際に演じてもらうことで、より学びを深めることができたと考える。担任とALTの先生が実際に演じるロールプレイを見て、楽しい会話の仕方を実感し、自らの学びに生かそうとする場面を多く設定することができた。これからの授業でも、ALTの先生の発音や表現を児童が効果的に聞くことができるようにし、外国語により慣れ親しめるようにしたいと考える。

また、決まった相手との対話を繰り返したため、対話が停滞したところもあった。より多くの友達と自由に対話をさせることで、リアクションの反応も多様になったのではと考える。しかし、単元ゴールに設定したALTの先生方との国際交流会では、学びを生かして楽しく反応をしながら活動する児童の姿が多く見られた（資料19）。様々な相手と対話をしながら外国語を発音する経験を多く積むことで、児童が外国語で気持ちを伝え合うことの楽しさを実感できるように、今後も取り組んでいきたい。



資料19 ALTの先生との国際交流会

(5) 2年生の実践

国語科「たからものを しょうかいしよう」

ア 授業の概要

本単元では、「自分のことをより知ってもらうために、宝物をクラスみんなに紹介する」というパフォーマンス課題を設定した。児童は達成に向けて、発表する内容を「始め」「中」「終わり」の構成でまとめる。次により良い伝え方となるように、聞き手に届く声の大きさや話す速さ等を意識して練習に取り組んでいく。話す練習を行う際には、聞き手が話し手に集中できるよう「話し手」「アドバイスする人」「撮影する人」の3つの役割で進めた。児童は友達との対話と撮ってもらった動画により、改善すべき点を見つける。自分の話し方に視点を置いて、人に伝える力を伸ばす学習と位置付けている。

イ 視点についての取組

視点①児童の主体性を引き出す学習課題の設定

まず一番に、「自分の宝物発表会」を開くことが、児童の主体性を引き出すと考えた。みんなの前で発表するにはどんな準備をすればよいのだろう、という不安が児童に生まれたようであったが、それについて考える必要性が同時に出てきた。単元始めに、どんな宝物を紹介すべきか家族と考えたり、宝物を紹介する文章は何から書き始めると良いのか考えたりする児童の姿が見られた。

また、この課題を設定することで、「友だちの話を聞いてみたい。」「自分のことを話してみんなに伝えたい。」という気持ちも高められた。発表会を行った時には聞き手から、もっと知りたいと沢山の質問が出された。発表会前の練習では、「メモを覚えてきて、何も見ずに発表してもいいですか。」と尋ねてくる児童もあり、「そうするとみんなの顔を見て話せるね。」と答え、児童の考えから目標とする姿が見つけら、それをもとに練習に取り組む姿が増えてきた(資料20)。



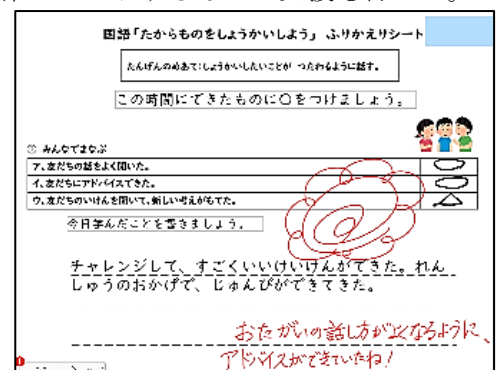
資料20 発表の練習をする児童

児童が「自分にもできそうだ」と感じることも、主体性を引き出す上で大切だと考えた。実態に即した手本を教師が示したり、文章の始めに書くことを丁寧に確かめたりするなどの支援も行った。

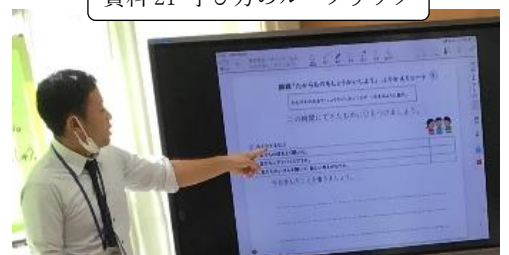
視点②児童自身が学びを実感できる評価の工夫

学校全体として取り組んでいる「学び方のルーブリック」と「成果物のルーブリック」を学年の発達段階に合わせて修正し、児童自身が自らの学びを評価し、よりよい学びにつなげることができるようにした。

まず学び方のルーブリックでは、児童の発達段階を考慮して、分かり易い表現であるように注意した。当初は低学年における観点を「すすんで」「みんなで」「創る」としていたが、「創る」がどういう意味合いなのか児童の理解につながりにくい面を感じたため、「深める」という言葉に置き換えてワークシートの作成に生かした(資料21)。またその日の授業にどの観点が重点的にかかわっているかを担任が事前に判断し、導入において視点を1つに絞って提示することで、児童が取り組み、振り返りやすい環境づくりに努めた(資料22)。



資料21 学び方のルーブリック



資料22 ルーブリックを活用した導入

また、成果物のルーブリックでは、本単元の特徴を踏まえ、文章構成と話し方で区別して、2種類のルーブリックを準備した（資料23）。このルーブリックの作成については、教師が一方的に作るのではなく、児童の気づきや意見をその都度盛り込みながら行うことで、児童が自らの思いをもとに中心に据えた学びを展開することができ、自信をもって振り返り、次時に生かす姿が多く見られるようになった。

成果物のルーブリック	【パフォーマンス課題】自分のことをより知ってもらうために、自分の宝物をクラスの人に紹介する。			
	A	B1	B2	C
内容構成	メモの内容を更に詳しくして話すことができた。	「始め」「中」「終わり」の組み立てでメモを書くことができた。	宝物の思い出を中心に書いて書いたり、書いたメモを読み返して、間違いがないか確かめたりできた。	紹介する宝物を決めることができた。
話し方	全体を見ながら話したり、更に分かり易く伝えたりできた。	話す速さや間に気を付けて話すことができた。	みんなが聞こえる声で話したり、文末を敬体にして話したりできた。	みんなの前に出て自分の宝物について発表できた。

資料23 児童とともに作成した成果物のルーブリック

ウ 成果と課題

成果として、児童の主体性を引き出す課題の設定を目指したことで、単元の終わりまで前向きに学習に臨む姿が見られたことがまず挙げられる（資料24）。また振り返りの充実により、本当に自分はできているのか、メタ認知的な視点で自分を見つめようとする姿勢が少しずつ高まったことを感じた。必要感のある課題設定と、質の良い振り返りを継続させることで、豊かな学び手の創造につながるだろうと実感できる実践となった。



資料24 単元最後の発表会の様子

一方、課題として、成果物のルーブリックでチェック項目が多くなり過ぎてしまった点が挙げられる。「間をあけて話す」「聞き手の顔を見て話す」等は、児童の意見から出されたためであつたが、児童同士で改善を目指す時に気を付けるポイントが多くなり振り返りにくくなる問題点にもなった。今後に向けて、特に意識したいポイントに絞ったり、振り返りしやすいカードなどを手元に持っておいたりすることの重要性にも気づくことができた。

(6) 1年生の実践

国語 「こえに出してよもう おとうとねずみチロ」

ア 授業の概要

本単元は、場面の様子に着目して、人物の行動を具体的に想像し、自分の体験と結び付けて感想をもつことが目的である。そこで、読み取った気持ちをもとに工夫して音読をし、「音読にBGMを付けて年長さんや保護者の方に聞いてもらおう。」という課題を設定した。また、音楽の「みつばちハニーのぼうけん」（教芸）という楽曲で行った鑑賞の学習で、想像豊かに聴いたり思いをもって表現したりする活動を通して、楽曲から喜怒哀楽の気分を感じ取ることを学んだ。そこで、国語と音楽のカリキュラムマネジメントを行い「おとうとねずみチロ」の場面ごとに、「みつばちハニーのぼうけん」「ちょうちょ」（教芸鑑賞教材）からBGMを選曲することにした。

さらに、どのような音読の仕方がよいのかという指標である成果物のルーブリックを提示し、目指す姿の共通理解を図った。児童がルーブリックに沿って振り返ったり、友だちも評価したりすることで、よりよい伝え方に近づくように取り組むことで、自分たちの表現の意図が伝わることの喜びを実感できるようにした。

イ 視点についての取組

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

単元導入では、「みつばちハニー」の4つの楽曲を聴かせ、場面にあったBGMを選ぶことを伝えた。また、主体的な学びを促すためにグループを組み、場面ごとに役割を分担するようにした。主

人公のチロの役は、全員が担当することができるようにするとともに、地の文も場面の様子を伝えるために大切な役割であることを気づかせ、みんなが主役であるということを伝えた。

また、自分で確認しながら課題解決できるようにするために、ロイロノートの録音機能を用いて音読の音声記録し、見返す活動を行った(資料25)。録音にはタブレット用のマイクを使用したことで、音声鮮明になるだけでなく、児童の意欲が高まった。自分の音読を客観的に振り返る際は、どのような音読の仕方がよいのかループリックを示した。自分の音読の工夫や場面にふさわしいBGMをグループ内で共有する場面を設けることで、自分が考えたことが認められる喜びを得たり、もっとよいアイデアを見つけたりすることができた。録音を重ねるごとに「気持ちをこめて読むためにもっと工夫して音読したい」という児童の意欲の高まりを感じた。



資料25 録音した音楽を聴いて改善点を伝え合う児童

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

授業を計画するにあたり、「どのように音読することがA評価なのか。」という基準を児童とともに話し合い、ループリックを作成した(資料26)。「動きをつけると、チロになりきって読むことができそう。」など、児童の声を取り入れて、教師と児童が具体的な姿となる基準を一緒に考えて、めざす姿を共通理解するようにした。

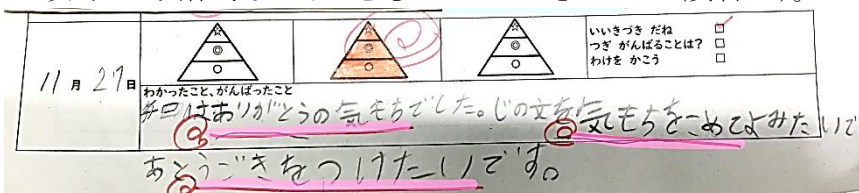
毎時間の振り返りは、ループリックの指標を示しながら、本時の観点をかみ砕いて説明し、みんなで一緒に振り返りを行った(資料27)。「ありがとうの気持ちをこめて読むようにしたい。」など、児童が振り返りに書いた言葉を取り上げることで、次時への具体的なめあてをもつことができていた(資料28)。

まなびかたループリック

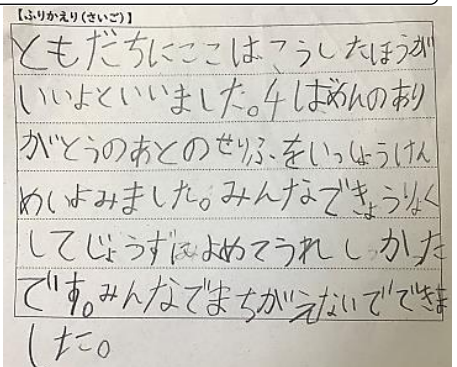


成果物のループリック	【パフォーマンス課題】音読にBGMを付けて年長さんとおうちの人聞いてもらおう。			
	A	B 1	B 2	C
BGMをつけた理由を伝え、動作をつけたり、言葉を増やしたりして読むことができた。(読む速さ・声の大きさ)	読む速さや声の大きさを工夫して、すらすらと読むことができた。	すらすらと読むことができた。	すらすらと読むことができなかった。	

資料26 学び方のループリック(上)と成果物のループリック(下)



資料27 学び方のループリックを用いた振り返り



資料28 成果物のループリックを用いた振り返り

ウ 成果と課題

これまでの学級の実態として、読み取ったことをもとに登場人物の気持ちになって音読することができる児童は少なかった。しかし、グループでの音読の録音やBGM付けの活動を通して、互いに協力してアドバイスをし合い、動きを付けるなど工夫して音読する姿が多く見られるようになった。本実践を通して、登場人物の気持ちを主体的に考え合う姿の伸びが大きく見られた。

また、BGMがあることで、気持ちをこめて音読することへの意欲が高まった児童が多く見られた。一方で、自分の音読についてループリックをもとに客観的に評価することがまだ難しい児童も一部見られたため、今後は、目指したい児童の姿を中核に据え、発達段階に応じたループリックの内容や活用の仕方について、様々な角度からの実践検証を通して、よりよい実践に努めていきたい。

6 研究の成果と課題

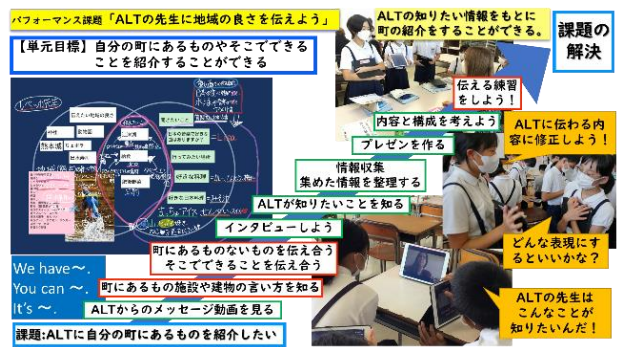
本年度は、3年計画で取り組んできた研究の集大成となる一年だった。授業観の転換、授業改善ということを大きなテーマに、単元全体を通して「豊かな学び手」が育つ授業づくりについて職員全体で検討を重ね、日々修正を重ねながら研究実践を行ってきた。2月に全国小学校英語教育実践研究会を開催することを一つのゴールとし、9月にモデル校の公開授業で研究の経過を公開し、研究内容について熊本市内外に提案した。どちらも多くの先生方の参加があり、多数の貴重なご意見をいただくことができた。また、講師としてお迎えした文部科学省初等中等局の直山木綿子視学官には、本校の取組や授業についてのご示唆もいただくことができ、今後の研究実践に向けた課題点が明らかになったとともに、新たなスタートをきる意欲も高まってきた。

本研究主題での取組を始めて3年目という一つの節目を迎え、職員全体として授業観の転換という意識の変容につなげることができたと感じている。本年度の取組を振り返り、次年度のよりよい実践につなげるため、視点に沿った成果と課題をこれから述べていく。

(1) 成果

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

- パフォーマンス課題をカリキュラムマネジメントの視点と関連付けながら設定することで、単元を通じた学びへの意欲が高まり、友達と協働して解決を図る姿が多く見られるようになった(資料29)。明確な相手意識や目的意識のもと、様々な教科での学びを関連付けながら取り組むことで、伝えたい内容がより深まり、既習事項を活用した表現の多様化や思いを伝えたいという気持ちの表れる学びの展開が見られた。また、「同じ校区の友達と仲良くなるために交流する」「作ったポスターを国際交流会館で紹介する」など、学んだことを実際に社会に広げる活動を取り入れることで、教室だけでは終わらない学びを実現し、児童の学びの意欲が一層高まった(資料30)。
- 児童の思いをもとにした言語活動を中心に据えて単元づくりを行ったことで、児童自らが思考を働かせながら言語材料を習得していく姿を多く見る事ができた。特に、ICT端末で思考ツールを活用することで、児童は自らのアイデアや概念を整理して修正を加えながら内容を深めることができ、自己表現や問題解決能力の向上も感じた。言葉の付け加えや順序の入れ替えなどの修正が容易になり、児童の思いに寄り合いながら内容を充実させることができた。また、児童が自らの活動を動画撮影してその成果を共有し合ったり、次時の自身のめあての設定に生かしたりすることで、表現するための語彙の獲得や他者とのコミュニケーション能力の向上にもつなげることができた。



資料29 単元構想のイメージ図

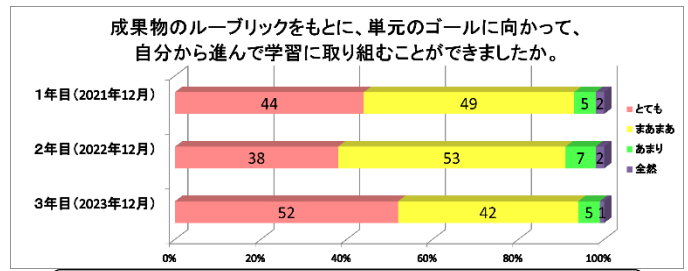


資料30 校区の友達との交流会

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

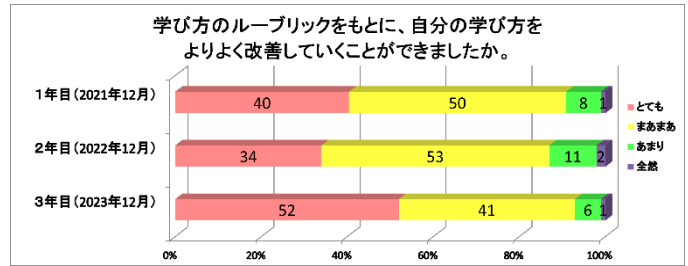
- 自己評価や相互評価に成果物のルーブリックを用いたことにより、単元ゴールを目指す過程で、目標を意識して友達とかかわり合う姿が広がり、自身の伸びをメタ的に捉えることもできるようになった。成果物のルーブリックは「どんな内容をどのように伝えるか」を児童とともに話し合っ

基準であるため、終末に位置付けている活動に向けた目的を明確に意識し続けることができ、目指すゴールで自分をよりよく表現するため、主体的に取り組む児童が大きく増えてきたことがわかる（資料 31）。また、外国語を用いた会話に苦手意識がある児童にとっても、単元を通して学ぶ目的がはっきりしているため、そのゴールを意識して粘り強く取り組む姿が見られるようになった。



資料 31 全児童アンケートの結果（3年間の変容）

- 学び方のルーブリックを用いることで、主体的・対話的で深い学びへの具体的な姿を共有することができ、学びに向かう意欲や学び方にも大きな高まりがあることが明らかになった（資料 32）。毎時間の学習活動の振り返りで活用することで、漠然と振り返ることがなくなるため、教科や領域等を問わず、児童自身がよりよい学び方に自ら近づいていこうとする力の伸びにつながることができたと考えられる（資料 33）。また、学び方のルーブリックの活用を進める中で生じた課題をもとに、職員で再検討を行って発達段階に合わせた形に修正するなど、より活用しやすい形に修正を加えて活用していくことで、職員におけるよりよい学び方の共有、ひいては授業観の転換にもつながることができた。



資料 32 全児童アンケートの結果（3年間の変容）

⑥2/2 Today's Goal 思いをもっと込めて伝えるには、どうすればよいただろう

書く内容に力を！ 《学びや気持ち・できようと思った・困った・(工夫)・自分の課題・友達との協力》
 今日は内容の順序を変えたり、質問を加えたりすることによってもっとなりたい！という思いを伝えることができました。順序が一番伝えたいことを最初に持ってきた方が相手も内容を理解しやすくなり、説得力が増すなど思いました。そして、質問も前は入れていなかったけれど、自分が好きなことに関連して付け加えることができました。このようなことを付け加えることで相手にもっと思いを伝えることができて良かったです!!

学び方のルーブリックで振り返ろう	主体的	対話的	深い学び	先生より
	A	A	B2	<input type="checkbox"/> 理解 Good! <input type="checkbox"/> Nice 問い! <input type="checkbox"/> 粘り強い!
				<input checked="" type="checkbox"/> 声付き Good! <input type="checkbox"/> Nice 課題 <input type="checkbox"/> Nice 友達との学び
				<input type="checkbox"/> Nice 対話! <input type="checkbox"/> 工夫 Good! <input type="checkbox"/> もう少し教えて

資料 33 学び方のルーブリックをもとに学びを振り返る児童

(2) 課題

視点① 児童の主体性を引き出す学習課題の設定

- パフォーマンス課題の設定に際して、教科横断的な視点を持ちながら児童とともに内容を検討してきたが、児童にとって本当に必要感のある課題づくりには、実践の準備段階において検討に時間がかかりすぎる面もあった。例となるイメージがあると実態に合わせて修正した実践にもつなげやすいため、パフォーマンス課題の蓄積に引き続き学校全体で取り組んでいき、職員全体での今後のさらなる活用にもつなげるようにしていきたい。

視点② 児童自身が学びを実感できる評価の工夫

- 成果物のルーブリックの段階をどのように設定し、どのように児童に示していくべきか、実践を重ねながら試行錯誤を繰り返し、取り組んできた。目指したい具体的な姿を児童の姿や声から見出していく方法について、今後も職員全体で検討を重ねていきたい。実践を続けながら改善を繰り返し、児童にとってさらにわかりやすく、よりよい学びにつながるものとなるよう、今後も検討を続けたい。

7 参考文献

- 文部科学省（2018）．『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 前田康裕（2021）．『まんがで知るデジタルの学び』．さくら社
- 奥村好美・西岡加名恵編著（2020）．『「逆引き設計」実践ガイドブック』．日本標準
- 西岡加名恵編著（2018）．『教科の深い学びを実現するパフォーマンス評価』．明治図書出版